紹介

東アジアにおける地域主義とアジア主義に関する歴史研究の現在

スヴェン・サーラ
クリストファー・W・A・スピルマン

最近の領土問題や歴史認識をめぐり、東アジアでは国家間の緊張が著しく高まっており、かつて注目されていた地域主義や地域統合への関心は一般的に薄れてきているように思われる。しかしその一方で歴史学の分野においては、地域主義やその先駆的な思想であるアジア主義をテーマとする研究成果が近年、数多く刊行されている。本論では、こうした国内外における東アジア地域主義・アジア主義に関する研究動向を紹介していく。

戦後の日本では、アジア主義というテーマは長年、研究者から敬遠され、主流の歴史学者からは、ほとんど無視されてきた。アジア主義は「ファッショ的」な右翼団体が標榜する思想と見なされてきたため、客観的な研究対象とは考えられてこなかった。こうした、アジア主義を思想としてすら認めない姿勢は、丸山真男の研究によるところが大きい。一九四七年に丸山は「日本ファシズムの思想と運動」の中で、「大亜細亜主義」を日本の「ファシズム乃至超国家主義の一つの特質」と位置づけたが、[1] 日本の農本主義や家族主義、家族制度について詳細に論じているのに対し、アジア主義には簡単に触れるに過ぎなかった。その後、まれに主流の歴史学者や政治学者がアジア主義を取り上げる場合もあったが、それはあくまでも「日本のファシズム」という枠内においてのみであった。[2]

ただし、一つの例外として、竹内好の研究を挙げることができる。竹内もアジア主義が思想としての体系性を備えていたとは考えていない。しかし、彼は「アジア主義は（中略）それぞれ個性をもった「思想」に傾向性として付着するものである」と主張し、アジア主義を独立したイデオロギーではなく、「一つの傾向性」として重要であると位置づけた。[3] これは、竹内自身が戦時中、アジア主義者であったことによるものであると思われる。彼の「アジア主義」の理解には、戦時中のアジア主義を過大に意識している面があった。確かに竹内が言うように戦時中、アジア主義は侵略を正当化するために利用された。しかし、竹内が考える以上に、思想としてのアジア主義は、すでに一九一〇年代にヨーロッパにおける「汎～地域主義」（Pan-isms）の影響を受けて、日本をはじめとするアジア諸国で具体的に定義されるようになり、実現可能な理想や外交路線として掲げられていたことに注意すべきである。[4]

冷戦の終結の影響もあり、一九九〇年代に入ると、東アジア

において、地域主義の構築が可能であり、なおかつそれが必要だという発想が生まれ、地域主義の歴史学的研究が盛んになった。そうした流れの中で、アジア主義の再評価が行われるようになったたことは注目に値する。東アジアの地域主義とアジア主義への関心を高めたのは、『アジアから考える』というシリーズだった[5]。このシリーズは、日本をトランスナショナルな文脈で理解すべきであることを提唱し、冷戦体制の縛りを解こうとした。ほぼ同時に『近代日本のアジア認識』[6]という共同研究の成果も刊行された。また、坪内隆彦の岡倉天心研究[7]と趙軍の『大アジア主義と中国』（亜紀書房、一九九七年）のようなアジア主義に関する具体的なケーススタディも出版された。

『近代日本のアジア認識』の執筆者の一人である山室信一は、アジア主義の研究に取り組み、二〇〇一年には『思想課題としてのアジア』（岩波書店、二〇〇一年）を刊行した。そのなかで山室は「文明」「人種」「文化」「民族」という概念をアジア認識の思想基軸として分析し、「アジアにおける思想連鎖」を解明して、アジア主義の思想や運動、外交政策における役割を論じた。特にこの書物の第三部は、アジア主義の歴史を理解するために不可欠な研究である。

二十一世紀に入ると学界では、東アジアにおける地域主義とアジア主義の歴史に対する関心がさらに高まり、多くの著書が刊行された。なかでもインパクトが強かったのは、一般読者を対象にした丸川哲史の『リージョナリズム』（岩波書店、二〇〇三年）、米谷匡史の『アジア／日本』（岩波書店、二〇〇六年）、井上寿一の『アジア主義を問いなおす』（筑摩書房、二〇〇六年）であった。専門書としては、松浦正孝のアジア主義研究が特筆に値する[8]。同時期に、竹内好のアジア主義の研究も「再発見」され、日本語で再版されるとともに、英語、ドイツ語にも翻訳された[9]。

次に日本国外におけるアジア主義研究の動向に目を移してみたい。冷戦期の日本において、アジア主義に関する研究がほとんど進展を見なかったのと同様に、一九八〇年代後半までは、欧米でもアジア主義に関心を向ける研究者はほとんど存在しなかった。数少ない例外として挙げられるのが、マリウス・ジャンセン（Marius Jansen）による孫文と日本のいわゆるアジア浪人の関係を扱った優れた研究[10]であった。全体的な傾向としては、丸山の影響により、アジア主義は超国家主義であり、ファシズムであるので、まともに研究する価値がないと長年見なされていた。しかし、冷戦が終結すると日本と同様に状況が変わり、欧米や中国で様々な研究成果が出版されるようになった[11]。

こうした状況の変化を受けて、国際的な共同研究も生まれた。スピルマンとサーラがアジア主義に関する論文を発表したことがきっかけとなり[12]、東京で二〇〇二年に「近代日本史における汎アジア主義（Pan-Asianism in Modern Japanese History）」という国際会議がドイツ日本研究所主催で開催された。二〇〇七年にはその会議の成果として、同タイトルの論文集が刊行された[13]。

この会議を通じて、多くの研究者が地域主義を研究のみならず、教育の場でも取り上げている事が明らかになった。そこで、筆者は教科書としても、研究参考書としても利用することができる『史料で読むアジア主義』(*Pan-Asianism: A Documentary History*)の編纂を企画した。竹内好が史料集を一九六三年に刊行して以来、[14] アジア主義に関する史料を幅広く紹介した書籍がなかったことが、この企画の主たる動機となった。しかも、竹内の『アジア主義』に所収されている史料は、日本のアジア主義に関するものに限定されている上に、思想史に偏っており、外交史や政治史を軽視している傾向があり、アジア主義の全体像を描き出してはいない。筆者は、アジア、北米、ヨーロッパ、オーストラリア、ニュージーランドなど、合計十四カ国の大学で教鞭をとっている三十人余の研究者の協力を得て、三年間の編集作業の末、二〇一一年に上下二巻として『史料で読むアジア主義』を刊行した。[15]

この史料集は、時代的には十九世紀半ばから現在までをカバーし、アジア各地でアジア主義を唱えた著作や論文、宣言、結社の設立趣意書などを収めている。英語で書かれた史料はそのまま掲載し、英文が見当たらないものは、日本語／中国語／韓国語／インドネシア語などから英訳し、それぞれに詳細な解説を加えた。この史料集と竹内の史料集との大きな違いは、外交政策において利用されたアジア主義的言説や政治結社の刊行物・宣伝(プロパガンダを含む)など、多様な史料が取り上げられている点にある。

この史料集は、欧米で大きな反響をよび、書評でも「画期的な著作」として高く評価された。こうした好意的な書評や評判を見ると、この史料集の出版が、欧米やアジア諸国におけるアジア主義の研究に大きく貢献していると思われる。[16] この史料集によって、アジア地域全体において思想として、また政治運動として存在したアジア主義の総合的な研究が可能になるであろう。今後も偏狭なナショナリズムを超克するために、トランスナショナルな見地からこうした研究がさらに進められていくことが期待される。

注

(1) 丸山真男「日本ファシズムの思想と運動」『現代政治の思想と行動』未来社、一九六四年、五七頁。

(2) たとえば、松沢哲成『アジア主義とファシズム――天皇帝国論批判』れんが書房新社、一九七九年。栄沢幸二『「大東亜共栄圏」の思想』講談社、一九九五年。

(3) 竹内好「解説」、竹内好編『アジア主義』筑摩書房、一九六三年、一四頁。

(4) Sven Saaler, "The Construction of Regionalism in Modern Japan: Kodera Kenkichi and His 'Treatise on Greater Asianism,' 1916," *Modern Asian Studies*, vol. 41, no. 6, 2007, pp. 1261–1294.

(5) 溝口雄三他編『アジアから考える』全七巻、東京大学出版会、一九九三―九四年。

(6) 古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所、一九九四年（新版は緑蔭書房、一九九六年）。

(7) 坪内隆彦『岡倉天心の思想探訪――迷走するアジア主義』勁草書房、一九九八年。同『アジア英雄伝――日本人なら知っておきたい二五人の志士たち』展転社、二〇〇八年。

(8) 松浦正孝『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか――汎アジア主義の政治経済史』名古屋大学出版会、二〇一〇年。松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか――記憶・権力・価値』ミネルヴァ書房、二〇一三年。

(9) 松本健一『竹内好「日本のアジア主義」精読』岩波書店、二〇〇〇年。

(10) Marius B. Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen*, Harvard University Press, 1954.

(11) Sven Saaler, "The Construction of Regionalism," op. cit.; Cemil Aydin, *The Politics of Anti-Westernism in Asia*, Columbia University Press, 2007; Eri Hotta, *Pan-Asianism and Japan's War*, Palgrave-Macmillan, 2007. なお中国でのアジア主義の再評価の表れの一つとして、王屏の『近代日本的亜細亜主義』（商務印書館、二〇〇四年）の刊行が挙げられる。

(12) Christopher W. A. Szpilman, "The Dream of One Asia: Ōkawa Shūmei and Japanese Pan-Asianism," in Harald Fuess, ed., *The Japanese Empire in East Asia and Its Postwar Legacy*, iudicium Verlag, Munich, 1998; Sven Saaler, "Pan-Asianismus im Japan der Meiji-und der Taishō-Zeit: Wurzeln, Entstehung und Anwendung einer Ideologie," in Iwo Amelung u. a., Hg., *Selbstbehauptungsdiskurse in Asien*, iudicium Verlag, München, 2003, S. 127-157. 後者は原型となったペーパーが二〇〇二年に発表されている。

(13) Sven Saaler, J. Victor Koschmann, eds., *Pan-Asianism in Modern Japanese History*, Routledge, 2007. シンポジウムに関しては、次のリンクを参照のこと。http://www.dijtokyo.org/events/pan-asianism_in_modern

(14) 竹内好編『アジア主義』筑摩書房、一九六三年。

(15) Sven Saaler, Christopher W. A. Szpilman, eds., *Pan-Asianism: A Documentary History*, 2volumes, Rowman & Littlefield, 2011 (http://www.rowman.com/isbn/1442206020).

(16) 新しい研究がまだ出版されつつある。Leong Yew, *Asianism and the Politics of Regional Consciousness in Singapore*, Routledge, forthcoming, 2013.

（上智大学准教授）
（九州産業大学教授）